俳句学習で言語感覚を磨き、語彙力を高める

群馬大学教育学部附属中学校
今井　靖

1　はじめに

通常、語彙力を高めるには、「漢字」「ことわざ」「慣用句」「四字熟語」「故事成語」「類義語・対義語」「同音異義語」「同訓異字」などの指導が挙げられる。

しかし、前述の指導を丁寧に行い、語彙を習得させる必要性は十分認めつつも、あえてここでは、「言語感覚を磨く」指導について述べることにする。なぜ言語感覚かといえば、語彙習得の中核を成すものとして言語感覚が重要だと考えているからである。

2　俳句は、粋なことば遊び

言語感覚を磨くには、「ことば遊び」が有効である。ことば遊びは、駄洒落、語呂合わせや早口ことばのように、楽しみながら自然と言語感覚を習得できるものが多い。

特に、江戸時代には、駄洒落（自嘲的な言い方だが）のことを「地口」といって、粋な男性の嗜みであったともいわれている。同時に、冗談話（ジョーク）も大切な素養だったらしい。そこから、俳諧が生まれ、川柳や俳句が発展したとするならば、まさに俳句は「粋なことば遊び」である。ちなみに、和歌（短歌）にも「掛詞」「縁語」「序詞」「枕詞」といった一級品のことば遊びがあるのだが、ここでは割愛させてもらう。

つまり、俳句には「粋の文化」が息づいている。すべてを語り尽くさず互いの共通感覚を前提としたことばのやり取りがあるのだ。「ツーと言えばカー」といった合意システムや「松に鶴」「梅に鶯」「紅葉に鹿」といった連想ゲームが存在しているのである。

これこそ日本特有の言語感覚であり、共通感覚ではなかろうか。

3　俳句鑑賞のツボを示す

最近の教科書では、俳句を取り立てて指導する場面が減ってきている。確かに、短歌や俳句についての指導事項は、学習指導要領の中に明記されていない。しかし、私は俳句学習にこそ語彙力や言語感覚を高める効果があると考えている。

古池や蛙飛び込む水の音　　芭蕉

私は、右の俳句を俳句の説明のためによく用いる。誰もが知っており、それでいて最も俳句らしい作品だと考えるからである。何気なく読んでしまえば、「ああ、蛙が池に飛び込んだのか。ふーん。」で流されてしまう。

しかし、一語一語のことばに着目して、よく考えてみよう。この俳句は、事実の描写（写生・情景描写）である。そして、事実の描写から作者の心情を推測させているのである。

鑑賞を深めるための発問としては、

①「古池」が内包しているイメージの広がり
→池の大きさ、周囲の様子など

②「蛙」が内包しているイメージの広がり
→蛙の種類、大きさ、色、数など

③「蛙飛び込む水の音」という部分が内包しているイメージの広がり
→水の音の大きさや余韻など

これら一連の思考過程から連想されるのは、「静けさ」である。そして、「静かだ」ということばを用いずに静けさを表現することで、奥行きを感じさせているのである。だからこそ、言語感覚を研ぎ澄ます場面であるとともに、「古池に」ではなくて「古池や」と切れ字を用いる効果も理解させられる。

万緑の中や吾子の歯生え初むる　草田男

この俳句には、二つの物が詠み込まれている。一つは遠景としての「万緑」と、もう一つは近景としての「吾子の歯」である。

一見何も関係ない物がドッキングしているこの句は、ことの本質を見抜いた鋭い洞察力が必要となることがある。この句では、万緑と吾が子の成長が重なり、生命力への感激が込められている。たとえるならば、大喜利などで行われる「謎掛け問答」と同じである。「この季節の万緑と掛けて、前歯が生え始めた吾が子と解く、その心は…生命力に満ちあふれています。」といった言語感覚である。

4　五・七・五のクロスワードパズル（創作）

俳句学習の醍醐味は、鑑賞だけではない。実際に自分で創作することによって、ことばへの執着心が生まれ、言語感覚が磨かれる。そして、創作することで語彙力も高まる。

俳句は限られた音数の中で、最大限の余韻を漂わせる表現をしなければならない。だからこそ、一つ一つのことばを精選し、推敲し、句を紡ぎ出していく。その過程の中で、効果的なことばを選び、見出し、使用するといったことばの評価活動が行われている。

この段階になると、ことばの重要性を感じ、「季語」が存在する意味も理解されてくる。そこで、資料集（便覧）や歳時記、国語辞典を用いて創作させていくのである。

【指導のポイント】

①感情の直接表現（形容詞・形容動詞）を用いず、事実の描写（情景や行動の描写）によって、間接的に心情を推測させる句にすること。
②「季語」が内包しているイメージから想像力を働かせる句にすること。（ことばで絵を描くイメージで）
③最も余韻が残るであろう語順に配慮して句を組み立てること。

5　おわりに

俳句学習は、語彙（ことば）を探求していく学習である。指導計画の終盤に、「句会」を開いて互いに批評し合うことを薦めたい。「上の五音と下の五音を入れ替えたほうが余韻が残るよ」、「寒い朝よりも白い息のほうが写実的だよ」、「別の季語はないのかな」などと互いの俳句を基にして考えを述べ合うことで、語彙（ことば）への感覚が鋭くなる。

互いの俳句から語彙に関する「情報を取り出し」、語彙について「解釈」し、語彙について「熟考・評価」し合い、さらに良い句へと高めさせるという過程は、ＰＩＳＡ型読解力の育成にもつながるだろう。

そして、完成した句をクラスの俳句集などにすれば、生徒の感慨もひとしおだと思う。

いまい　やすし　群馬大学教育学部附属中学校教諭。国語科の授業は、「教科書だけに頼ってはいけない」と考え、学習素材を探している毎日。生徒と共に国語力を磨きたいと願っている。